

I・IS 《イフ・インフイ  
ニット・ストラトス》

嘘つき魔神

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

さまざまなIFを集めただけ。お楽しみ頂ければ幸いです。

# 目次

始めに

前書き

1

もしも一夏が鈴と戦った後、力を欲しがったら？

第1話：夢、否定されて

4

第2話：強さ、求めて

7

第3話：夏の日、出会って

10

第4話：走れ一夏！

13



# 始めに

## 前書き

あなたにこんな経験はないだろうか？

「あの時もつと勉強しておけば……」

「あの時こうしておけば……」

この世には無数の後悔が溢れている。それを仮に『IF』としよう。話は変わるが、あなたはパラレルワールドというものを知っているだろうか？例えば、お菓子があったとしよう。それをあなたは食べなかったとしよう。だが、別の世界ではあなたはお菓子を食べたとする……あれ、どっちかというところこれシュレインガーの猫理論じゃ……こんな、話を戻そう。

つまり、ぶつちやけるなら『IF』Ⅱ二次創作である。あの時このキャラがこんな行動をしていたら、もしこんなキャラだったら。今から語り始めるのはインフィニット・ストラトスのもの話。言うなれば、IF・インフィニット・ストラトスでしょうか。もしも一夏が白式に乗っていないかったら？そもそも一夏がISに触れなかったら？箒が剣道を習っていないかったら？セシリアの両親が死んでいなかったら？鈴の両親が

離婚していなかったら？ シャルロットが普通に産まれていたら？ ラウラがヴオーダン・ノージエに適合していたら？ 適当にあげてもこんなのが I F が溢れている。

ここからあなたが見るのは、いわばもしものお話の宝庫です。さあ、心行くまでご堪能を……

と長々書いたのはいいですが、ぶつちやけると私のえーと、ああ……うん、アレです、はい。私がおもしろいところだったら？ という妄想を詰め込んだ、およそ人に見せられないアイデアのゴミ箱ですね。それを長々修飾できるのは自分でもビックリやで……ヤバイ、文字数足りね。

あ……とりあえず、一つ短い I F を書いてみます。それを読んであ、駄目だと思っただ人は即座に避難を。

「くそお！ 何だこいつら！」

「分からない、けどなんかヤバイ！」

「こゝは I S 学園、I S を操縦できる者達が I S について学び、生活する施設。そんな

ここは、現在戦火に包まれていた。ISのようでISでない、そう決定付けられた謎の襲撃者達によって、多くの生徒がすでに地に伏していた。

「らあー！」

一番先頭で剣を振るうのは本来ここにいるはずがない男子生徒、織斑一夏だ。だが、すでに彼のISはぼろぼろ、いつ装着が解除されてもおかしくない状況だった。

「……何でだ！何で、こんなことを！」

そう、一夏は虚空に向かって叫ぶ。彼の脳裏には、悪意なぞ感じさせないほどの白い白衣が浮かんでいた……

はい、これは、もしも東がIS学園に攻め込んだら？という『IF』です。こんな風に、いろいろ書いていくので、お口に合えば、お楽しみください。

もしも一夏が鈴と戦った後、力を欲しがったら？

## 第1話：夢、否定されて

「……」

IS学園自室のベッドに座りながら何かを考え続ける少年、おりむらいちか織斑一夏。彼の心には、ある楔が打たれていた。それは、自分と同じ男性操縦者、かみかぜはるま神風春馬の放った言葉であった……

クラス代表対抗戦にゴーレムが乱入してきた日の夜、一夏は春馬に誰の目にもつかないような場所に呼び出された。11時という、本来寮を出てはいけない時間だが、春馬の放つ切羽詰まった雰囲気が一夏に断るといふ選択肢を与えなかった。

「なあ、神風……？」

連れ込まれた場所の暗さとおどろおどろしさにさすがの一夏も恐怖心を煽られる。

「……」

やっと春馬は足を止め、一夏に向き直る。そして、こう切り出した。



「……おい織斑、お前、何であの時逃げなかった？」

「え？それは……」

「守りたいから、か？はん……」

一夏が言うだろう答えを先に言い、それを嘲笑う。

「……そうだけど」

「ああ……イラつくんだよ！その腑抜けの考えが！」

そう言い、春馬は思い切り一夏を殴り付ける。そして、倒れ込んだところを胸ぐらを掴みあげ、手を頭に添え、再び思い切り壁に叩きつける。

「ぐっ……っ……」

「痛いかな？だろっうな！だけどなあ……鈴や織斑センセの方が痛いだろっうな、お前があんな愚か者なせいだな……」

その言葉と共に一夏から手を離す。そのまま壁にもたれ、座り込んだ一夏を見下ろしながら、こう言い放った。

「お前は弱い、どうしようもなくな……だが、それは戦闘経験かどうかという話じゃない……お前は、本質的な弱者だ、俺の物語を引き立たせる、な……」

「何言ってるんだよ……神風……？」

「気軽に俺の名を呼ぶなよ敗北者、なあ、言ってみろよ？あの時俺がああ……ISを

倒さなかったらどうなった？」

「それは……」

「はあ……これだからカスは……失敗の可能性ぐらい考えて行動しろよ！間抜けえ！」

そう言つて一夏を怒鳴り付ける。普段見せている姿と全く違う側面に、一夏は気圧されてしまった。

「いいか？聞くぞ？何でお前は受験勉強なんぞしてた？」

「それは、千冬姉に少しでも楽に……」

「はあ……これだから分かつてねえ！一般高校卒業なんぞ、織斑センスの顔に泥を塗る気か？」

「は……？」

「……ふん、もう何も言う気はねえ……だがなあ……これだけ言っておいてやるよ……」  
そして、一夏の耳元に顔を寄せ、こう言つた……

「お前みたいな弱者には誰も守れない、そして、お前は屑だ、自分の立場なんぞわきまえない、な……」

後半の言葉はもはや耳に入らなかつた。春馬は一夏のその様子を見て、満足そうに鼻を鳴らし、立ち去っていく。そして、メンタルがズタボロになった一夏は、疲れたわけでもないのに重くなった体を引きずりながら部屋に戻つたのだつた……

## 第2話：強さ、求めて

「……守れない、か……」

あの後、奇跡的に寮長に見つからず戻り、応急手当を済ませた一夏。しかし、その心は未だどしや降りであった。

「……そもそも、守るって何なんだ……？」

ここで一夏は、自らが守るということに対し、理解が浅かったことに気づく。そして、守る、ということについて再び考えようとするが……

「……ふわあ……」

一夏を唐突に眠気が襲う。今日はゴーレム戦での無断行動の反省文を書かされており、ようやく終わったのが10時47分頃、先に終わり、風呂に入って戻ってきたルームメイトの箒も、睡魔には勝てず眠ってしまった。一夏もさっさとシャワーを浴び、さして寝ようとしたところに春馬がやって来たのだ。殴られ、僅かの間眠気が覚醒していたが、その僅かの時間が今過ぎたらしい。

「…………朝早く起きて考えるか…………」

考えようにも眠気で上手く頭が働かず、それぐらいなら寝た方がいいと考えた一夏は柔らかいベッドに身を預け、そのまま眠りについた……

「…………ふわああ…………うーん…………もう朝か…………う？」

朝5時49分頃、まだ早朝といえる時間に一夏は目覚めた。そして、それを認識すると、これ幸いといわんばかりに考え始める。

守るとは何か？それを考え続けた。嬉しいことに、時間はまだまだある。しかし、結論は出ない。一夏の心に刺さった楔が、考えを纏めさせまいとする。次第に、守るとは何かより、自分は何でこんなに弱いのか？という疑問が一夏の頭に浮かぶ。そして、すぐに理解した。

何もかも春馬の言う通りだった。ISに乗れる、そう分かったときからすぐにISに慣れると言う名目で修行でもしておけばよかったのだ。疲れ果てた一夏は、もはやまともを考えることなんてできなかつた。そして、しばらくの間、沈んだ様子でベッドに座っているのだった。

くつつそどうでもいいし、皆察していると思うが、神風春馬は転生者である。コツコツ

鍛えているならまだしも、チートをもらわなきゃ一夏に勝てるかも怪しいやつがよくもまあああ言えるものである。

「……………うし」

やがて、一夏はある決心をする。千冬姉に稽古をつけてもらう。千冬姉には申し訳ないが、これが考え付く限りは最善なのだ。使っている機体も、葛桜の後継機のようなものだ。そう思い、千冬がいる部屋まで歩いていく。

「ブリュンヒルデに頼るのか？」

そう思っただけだそうとしたところで、春馬に声をかけられる。

「……………何だ？」

「ふっ……………いや、お前は人に頼るのか、お前のような弱者に教える気はないと思うがな？  
織斑センセは」

「何だよいきなり……………！」

ふつと一夏を嘲笑うようにしつつ、春馬は去っていく。こうして、一夏は、千冬に頼る気がなくなってしまう。即ち、一夏のパワーアップの機会は失われてしまったのだ

……………

## 第3話：夏の日、出会って

あれからしばらくして、暑さが目立つ季節になってきた。そんな今でも、一夏は春馬によつてけちよけちよにされている。そもそも、向こうの機体は一夏でも「卑怯だぞー」と言いたくなるくらいにチート満載、これにどうやって勝てと？ 幸いなのはセシリアや鈴、箒達や一部のクラスメートが仲良くしてくれていることだろう。だが、それでも一夏の気分は晴れなかった。いくら自主練をしようと、鈴やセシリアに代表候補生の受ける訓練をつけてもらっても、どれだけやっても春馬に追い付けない。

おまけに、皆の前ではあの夜見せた一面は出ていないが、誰もいないところになるとやれ覚悟が足りないだの、やれやる気がないだの、挙げ句の果てには虫けら扱い。こういうのもあつて、一夏のメンタルは一向に回復の目処を見せなかった。

さて、この時期に一夏のクラスの副担任の山田先生が珍しい話を切り出した。

「えつと……今日は、転校生が2人います……」

……ひどく疲れた様子で。一体全体何ゆえこんなことになっているのか一夏には皆

目見当もつかず、むしろ、その転校生に興味が湧いてきた。山田先生がドアの向こうに声をかけ、転校生2人が入ってくる……片方は、男子用の制服を着て。

「フランスから来ました、シャルル・デュノアです、よろしくお願いします」

「「「「「……」」」」」

何の反応もなかったことに首を傾げるシャルル。何かを察し、耳をふさぐ一夏。依然変わらず椅子に背を預け、おまけに、机に足までのせている春馬。そして、数秒後……

「「「「「きやあああああ！」」」」」

「ふ、二人目の男性操縦者！」

「しかも守ってあげたい系！」

「ウス＝異本が厚くなるわね！」

……これを聞きながら、一夏は哀れシャルルと思った。ここに来たら最後、そうせざるを得ないと言うのに、何故かホモだの何だのの不名誉極まりない称号がつくんだから。さて、一夏の的に気になったのが、片方の銀髪で眼帯の転校生だ。先の女子の悲鳴にも周りが二次被害を受ける中、一人顔色一つ変えず入ってきてから止まった位置に佇んでいる。

「……えつと、ボ、ボーデヴィツヒさん？自己紹介してもらっても……？」

そして、山田先生がそう言う。そして、ボーデヴィツヒと呼ばれた少女は自己紹介を

する。

「ラウラ。ラウラ・ボーデヴィツヒ」

……自らの名前を告げただけの、簡素なものだったが。もつと濃い自己紹介を期待していた女子達に、困惑が生まれる。そして、ラウラは、教室を見渡し、一夏を見つけると、まるで人が変わったように叫ぶ。

「貴様か！」

そのまま一夏の席の前に来たと思ったとき、一夏は吹っ飛んでいた。その脳裏には、彼自身の青春が！流れるわけないんだよなあ……ともかく、ここ最近自分が受けた暴力の何よりも痛いということだけを、一夏は認識したのだった……



## 第4話：走れ一夏！

「……つえ？」

ビンタされた。それを理解するのに数秒の時を要した。激しい痛みとラウラを見上げる構図。それが自分が吹っ飛ばされたことを物語っていた。そして、それを理解して、はいそうですかで終わる訳がない。誰だつて、いきなり訳も分からず殴られれば腹が立つ。無論一夏も例外でない。

「……何しやる？」

本当なら一発ぶん殴っておきたいが、それを抑え、怒気を声に滲ませる。

「ふん、教官の弟がこれか……期待はずれだな」

だが、ラウラは氣にした風でもなく、一夏を煽る。

「いきなり人にビンタかましてくれた奴の台詞とは思えないな……？」

「フツ、惨めに吹っ飛んだというのに、虚勢だけは立派だな？」

互いに感情が高まり、イラつきが最高潮に達しそうになる。互いにピリツとした空気を放ち、睨み合う。周りが冷たい空気に包まれ……

「何をしている馬鹿者共！」

「ー。」

冷たい空気を晴らし、千冬が現れた。もう安心だ!

「織斑先生……邪魔しないでくださいよ」

「同感です、教官」

何と、2人は千冬に反論したのだが……スパンと小気味良い音が鳴り、2人はうずくまることになる。

「うおお……」

「くろう……」

「お前らの個人的な喧嘩に付き合うつもりはない、おとなしく席に着くんだな」

「……はい」

1組の鬼には敵わない、1組のパワーバランスが示された瞬間であった。

「」「デュノア君!」「」

「さあ、観念なさい!」

「織斑君×デュノア君……デイ・モルトベネツ! いい! すごくいい!」

「腐女子のプライド! 漫画部の栄光! 他の学校などに、やらせはせん! やらせはせん!

やらせはせんでお！」

1時間目の準備時間、一夏とシャルは女子の軍団に追われていた。

「ねえ!?何この状況!?!というか最後の人は何!?!」

「知らん!とにかく走れ!捕まったら終わりだ!後最後の奴はドルだな!」

そんなことを言いながら逃げていく。だが……

「逃がしはせん!逃がしはせん!逃がしはせんぞお!」

「ほらほらスクラム組んでほらほら!」

「諦めろお!大人しくウス!異本の題材になれえ!」

前からスクラムを組み、一夏達を捕らえんとする女子達の姿が!

「はあ……しようがない、シャルル?ちよつと許せ!」

「へ?ふにやあ!」

「「「きやああああ!お姫様だつこ!」」」

一夏はシャルを抱き上げ、走る。目指すは廊下に置かれたロッカー!

「待あああああてえええええ!」

3……!

「うわああああ!?!一夏あ!?!」

2……!

「「「あんた達はもうおしまいよお!」」」」

「……………」

一夏はシャルを抱き上げたまま飛び、ロッカーを踏みつけた! 壁を蹴り、迫る女子の壁を抜け、そのまま更衣室に走る!

「逃がしたあ!?!」

「し、しまった!?!お、追ええ! 皆の衆! 追ええ!」

だが、既に一夏達は更衣室に鍵を掛けていた。ミッションコンプリート、一夏達の勝利だ!

「ふう、ごめんな、シャルル? 大丈夫か?」

「…………し、死ぬかと思った…………お、織斑君、な、何してたのさ…………」

「…………悪いが話は後だ、早く着替えないと織斑先生に…………」

「お、織斑先生に…………?」

「…………」

「ひ、ひえ!」

そう言いながらシャルはさっさと着替え始める。それを横目に一夏もさっさと着替える。着替えには1分も掛からず、さっさとグラウンドに向かうのだった……